

Title	[書評] 施子愉「柳宗元年譜」
Author(s)	笈, 文生
Citation	中國文學報 (1959), 10: 156-160
Issue Date	1959-04
URL	http://dx.doi.org/10.14989/176704
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

らである。すなわち、わたしたち外國人にくらべて、すくなくとも自國の詩をよむ編者たちの方が、李詩についての讀みがよりふかいと感じられる點で二書は輕視できないこと。さらに、李詩そのものを材料として追求している點で、李詩によせる愛情のふかさのようなものの點で、「李白詩文繫年」よりも「李太白年譜」の方により特色があるということによる。數字の妙な援用や、非科學的な面があるにもかかわらず、黃氏の著はおもしろいのである。

しかしながら、やはり二書の仕事は創造的であり、有がたい前例である。これらを足がかりとして、さらに科學的な操作と、作品自體への讀みをふかめることにより、より完全な李白年譜と詩文編年をつくりあげていけるであらうし、またその意味でこそ、二書の出版は價值をもつといえるであらう。

(京都大學 島田久美子)

施子愉 「柳宗元年譜」

武漢湖北人民出版社 一九五八年七月 一二四頁

柳宗元の傳記は唐の文學者としてはよくわかる方である。それは詩文集四十五卷・外集二卷・補遺一卷という大量の著作が傳わつてゐる事や、複雑となるべき後半生が、湖南の永州に十年、廣西の柳州に五年という變化の少ない流謫生活だつた事にもよるだろう。そのためかどうか、年譜はこれまで比較的簡單なものしか作られていない。その古いものとして宋の文安禮の「柳文年譜」(紹興五年へ一一三五)序)は、詩文の系年はかなり精しいが、その行事は要點しか記されていない。おなじく宋の張敦頤の「柳先生歷官紀」(乾道五年へ一一六九)序)はその缺を補うほどのものでもない。我國では、齋藤拙堂「柳柳州年譜」(續文話)卷四・天保七年(八一八三六)、富山房編輯局編「唐宋八大家系圖竝年譜」(漢文大系「唐宋八家文上」附・明治四十三年(一九一〇))、

清水茂「韓愈柳宗元年譜」(「唐宋八家文」附、昭和三十一年「九五六」)がある。拙堂は文安禮の年譜を見ていないが、やはり簡略で體裁もよく似ている。漢文大系は殆んど文安禮に依つてゐる。清水氏のは、韓愈及びその他の文學者の行事も一緒にして表になつてゐる點は便利であるが、それ故に一層簡略になつてゐる。

このたびの施子愉氏の「柳宗元年譜」は、これまでの「輪廓具ると雖も、簡略殊に甚し」かつた年譜の不備を補わんとされたものである。序によれば、稿は既に十餘年前に成り、一昨年「武漢大學人文科學學報」(一九五七年第一期)に紙數の關係から一部省略して發表されている。

柳宗元の傳記で比較的よく分つてゐる後半生に較べて、問題になるのは前半生、殊に幼年期である。その大半を長安で過した事はほぼ確かであるが、生地については疑問が残る、又十二、三歳頃南方にいた形迹もある。河東というのは勿論先祖の出をいつたものであり、生地は長安であつたとするのは齋藤拙堂の説であり、施氏の考えも大體同じである。しかし生地は吳、すなわち今の江蘇の地帯である

とする清の全祖望の意見も全く無視することは出来ないであらう(鮎埼亭集外編卷四十・河東柳氏遷吳攷)。祖父柳察躬は湖州德清令であり、父柳鎮は安祿山の亂後一族を擧げて吳へうつてゐることは「先侍御史府君神道表」(卷十二)に見える。全祖望は、集中に吳の地方に關する言及がないことから吳での生活が甚だ短かつたのではないかという疑いを残しつつも、楊氏との結婚も吳であつたとする。ここでは全祖望の論據も引いておくべきであらう。

十二、三歳頃江南地方にいたらしい事は、僅かに語られる當時の思い出を、注意深く集中から拾ひ出すことによつてほぼ明らかにされた。氏は引かれなかつたが、全祖望が言及してゐる「羈貫江介を去り、世仕函嶠を尙ふ」(卷四十三・遊朝陽巖遂登西亭二十韻)の句も證據の一つになるであらう。所でかく江南にいた原因については、氏は興元元年、父が鄂岳沔都團練使判官として赴任したのに同行したものと推定しておられるが、この頃は、節度使の反亂相次ぎ、徳宗は前年より長安を脱出して奉天より梁州へ逃れるという不穩な情勢にあり、柳宗元の南方旅行も、この難を避け

てのものではなかつたろうか。ちなみに、韓愈も建中から貞元にかけて、中原の難をのがれて江南に食を求めている（韓集卷一復志賦、卷二十二歐陽生哀辭、卷二十三祭鄭夫人文）。

しかしかかることよりも、本年譜の功績は、その殆んど全作品の制作年代を手際よく推定し、年ごとに排列された点にある。これは年譜としては當り前の事かもしれないが、從來古文家としての成長變化の迹をたどることが等閑に附されていた事實を考えるならば、本書は將來の研究に良き手懸りを與えたものといえるであろう。

そこで、作品に制作年がはつきり示されているものは別として、氏の作品推定の方法、態度を検討して見たい。それは率直にいつてかなり大膽である。例えば、「非國語」六十七篇を元和四年の作とし、「守道論」「六逆論」「晉文公問守原議」の諸篇も「非國語」と作意が同じであるとして、(?)をつけて同じ年におき、又永州で愚溪を得たのが元和五年であるから、愚溪に關する詩文も同年におくという方法が、しばしば用いられる。年譜を作る場合、ある程度こうした方法も取らざるを得ないであらうし、それが多少

の不正確さを伴つても、意味をもつ場合があることを思えば、一概にその安易さを責めるべきではあるまい。ただこの様な不確かな推定には、符號でもつけてはつきり區別しておいてほしかつた。(?)のあるものはわずかにすぎない。

右の様な方法によつても決められないものはどう處理されているか。氏は、柳宗元の一生を、長安時代（貞元二十一年まで）、永州時代（元和九年まで）、柳州時代（元和十四年死まで）の三期に分け、作品にあらわれる人名・地名・時事などからいずれかの時期と推定出来るものを、それぞれの最後の年にまとめて收めた。かくて、どの時期のものとも分らぬものは、全作品六〇二首のうち僅か一六首となつた（「非國語」は全部を一とかぞえ、また氏が他人の作としたものは除く）。私は、これらを一つ一つ検討してみても、氏の推定方法に、それがもたらす成果を豫想しつつ、肯定的であろうとしたが、その大膽さにしばしば不安の感を抱かざるを得なかつた。「種樹郭橐駝傳」「梓人傳」を長安時代の作とし、「宋清傳」「河間傳」を永州時代の作とされるのなど、その理由は全く示されていないけれども、いまだ少し慎

重に検討すべきではないだろうか。

以下本書全體を通じて氣づいた點を少し列擧する。

一、年數の計算方法について。伯姉の死を貞元十八年とされるのは、元和七年に卒した夫崔簡の權厝誌「夫人河東柳氏、…先崔君十年卒」（卷九）によつて逆算した結果であるが、この計算は正しいであろうか（十年というのが概數であるかどうかはしばらく措く）。元和十年、許されて永州より長安へ歸る時の詩「十一年前、南渡客、四千里外北歸人」（卷四十二詔追赴都二月至霸亭上）は、永貞元年永州へ流された當時を回顧しての句であるが、これは氏の數え方では十一年にはならない。つまり當時は足掛けによる計算が普通だつたのではないか。従つて姉の死も貞元十九年とすべきであろう。又「別舍弟宗一」詩を「一身去國六千里、萬死投荒十二年」によつて元和十一年の作とされたのは足掛けによる計算であるのに、崔敏が永州刺史に赴任した年を、元和五年に卒した同人の祭文「出令三載、人無怨讟」によつて、元和二年とされるのは何故だろうか。従つて又、陽城が道州刺史となつた年の考證で、柳宗元の文章に見える

「…于茲四祀而已」と「…又四年九月己巳…」の二つの「四」字を「三」字の誤りとされるのも、早計に過ぎはしないか（二一頁）。

二、楊氏を娶つたのを、「亡妻弘農楊氏誌」（卷十三）の「未三歲…」によつて、貞元十二年とされているが、それでは、少し後に續く「故自辛未、逮于茲歲、累服齊斬、繼繼哀酷、其間冠衣純采、期月者三而已矣」をどう解釋されるのか。妻の死は貞元十五年である。吳で娶つたかどうかは別として、ことは齊藤拙堂に従つて辛未の歲、貞元七年とする方がより妥當であろう。

三、「貞符」（卷一）を、その序に「臣爲尙書郎時、曾著貞符」とあるのによつて貞元二十一年の作とされたが、少し先を讀めば「會貶逐中輟、不克備究、武陵卽叩頭邀臣、…」とあり、尙書郎の時には完成していない。吳武陵が永州に流されたのは元和三年だから、それ以後の作でなければならぬ。文安禮は元和三年としている。

四、「尊勝幢贊」（卷十九）を、序に「睦州於是誠焉不疑」とあるから姑く元和三年に定めるとされるが、すぐあとに

「馬孺人之墓……」とあり、これは馬氏の死んだ五年か、それ以後の作である。

五、「起廢答」(卷十五)は永州時代の作で、その制作年は不明になつてゐるけれども、「會今刺史、以御史中丞來蒞吾邦、……今先生來吾州亦十年……」とあるによれば、元和九年のはずである。

六、劉禹錫が監察御史になつた年が貞元十九年である事に(?)をつけておられるが、これは「通鑑」に見えてゐるし、氏が後に引かれる「子劉子自傳」には「明年冬擢爲監察御史」なる記事があり、恐らく柳宗元が十月監察御史になつたのと同じくするだろう。

七、魏仲舉の「五百家註柳先生集」は今二十一巻しか傳わらぬとあるが、その完全なものは我國に數部傳つてゐる。即ち、元末明初の亂を避けて來日した福建の俞良甫が北朝の嘉慶元年(一三八七)嵯峨で刊行した「新刊五百家注音辯唐柳先生文集」四十五巻がそれである。この書については、既に澁江全善、森立之の「經籍訪古志」や、島田翰の「古文舊書考」に紹介されている。

この他、單純な間違ひや、詩文の題の不正確さ、誤植等いくつかあるが、繁を嫌つて擧げない。

以上指摘して來た如く、この書はかなりの大膽さと不正確さを含んではゐるけれども、今後柳宗元の研究には少なからぬ便宜を提供するであらう。最後に欲の一つをいえば、韓愈との關係をもう少し明らかにしてほしかつた。全祖望の「韓柳交情論」(鮑培亭集外編卷三十七)は興味ある一つの手懸りを示している。

(京都大學 寛 文生)

錢鍾書 「宋詩選註」

北京 人民文學出版社 一九五八年九月 三六八頁

これは北京の中國科學院が編集する中國古典文學讀本叢書の一冊である。著者錢鍾書(字は默存)氏の學者としての業績について、日本では比較的知られていないようであり、われわれも多くの資料を有しないが、この機會に知見の及ぶ一二をしるそう。戦前の論文では、Su Tung-po's